

# 明・崇禎帝の諡号について（４）

## The Posthumous Titles of Ming Emperor Chongzhen (4)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

### (4)

(2) で検討したように、清政権は、北京に進出してからのきわめてはやい時期に、崇禎帝の諡号を「欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝懷宗端皇帝」と決めた。しかし、前王朝の亡国の皇帝である崇禎帝に「懷宗端皇帝」と「宗」をつけるという不備があった。そこで、順治十六年に諡号を「莊烈愍皇帝」と変更する。ただし、十六字の尊号（諡）の「欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝」は、そのままであったようである。

では、この「欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝」は、どのような意味を持った尊号（諡）であったのだろうか。これも、浅学の私が調べてみたところ、次のようなものではないかと考える。

欽天は、『書經』仲虺之誥に、

欽みて天道を崇とび、永く天命を保つ（欽崇天道、永保天命）。

とあるのを踏まえ、

守道は、『左傳』昭公二十年十二月に、

仲尼 曰く、道を守るは官を守るに如かず。君子 之を韙<sup>レ</sup>（是）とす、と  
（仲尼曰、守道不如守官、君子韙之）。

とあるのを踏まる。

敏毅は、唐の權德輿（字は載之。天水の人）の「金紫光祿大夫司農卿邵州長史李公墓誌銘」（『文苑英華』卷九百四十一所引）に、

唯だ公は開敏（通達明敏）にして毅直なり（唯公開敏毅直）。

と用例がある。

敦儉は、曹植「武帝誄」に、

敦儉にして古を好み、尚古を玩ばず（敦儉好古、不玩尚古）。

とあるのを踏まえ、

弘文は、『論衡』宣漢篇に、

漢をして弘文の人<sup>の</sup>有らしめ、經に漢の事を傳え、『尚書』・『春秋』に則らしむれば、儒者<sup>の</sup>之を宗とし、學者<sup>の</sup>之を習う。

とあるのを踏まえる。

襄武については、熹宗天啓帝の尊号にも用いられるが、いまのところ見い出せない。

體仁は、『易』乾卦・文言に、

君子は仁を體すれば、以て人の長たるに足る（君子體仁、足以長人）。

とあるのを踏まえ、

致孝は、『易』萃卦・彖言に、

王<sup>いた</sup> 有廟に假<sup>まつり</sup>るは、孝の享を致すなり（王假有廟、致孝享也）。

とあるものなどを踏まえて撰せられたのではないかと考える。

すると、天道をつつしんで、その道を守り、敏しみ毅く、敦く儉で、ひろい学問を持ち、武力を<sup>とりのぞ</sup>き、仁を自分のものとし、[孝心の供物を先祖送り届けるような] 孝の心を持った人物である、といったかったのであろうか。

では、「懷宗端皇帝」はどのような意味をもったものであるのか考えてみたい。

### ①懷宗端皇帝

まず、「宗」については、(2) で検討し、また『三垣筆記』にも、

……新朝（清朝）の廟號を遵議するの人の「懷帝」と稱せずして「懷宗」と稱するが若きは、尤も異なり。何れの家の宗なるかを知らざるなり。金の哀宗は乃ち其の末主の承麟の諡する所なり。我が明は止だ元の庚申君に

諡して「順帝」と曰うなり（『三垣筆記』筆記中・崇禎）。

とあるように、前政権に対するものとしては、不適切であった。

さらに、計六奇（字は用賓，号は天節子，別に九峰居士と書す。江蘇無錫の人。諸生。明・天啓二年〔一六二二〕～？）は『明季北略』で、清政権が「懷宗端皇帝」としたことを、美諡ではないとして、次のように批判する。

……按ずるに諡法に「慈仁（仁愛）なるも短折（早死）するを懷と曰う」と。昔、劉聰 洛陽を寇陷し、晉の懷帝を執え之を殺す。年<sup>はじ</sup>甫めて三十なり（『晉書』孝懷帝紀）。宋の端宗<sup>①</sup> 元兵の迫る所と爲り、硯州に崩ず。年 僅かに十一なり。是れ「懷」と「端」とは俱に美諡に非ず。先帝 身を以て社稷に殉ずるは大義なり。攝政王（ドルゴン）京に入りて首めに諡を議するを命ず。帝を尊ぶの意 知る可し。而るに〔李〕明睿 明の舊臣を以て、素より寵握を膺くるに、美諡を以て帝に加えず、而して稱するに「懷」・「端」を以てす。是れ帝を視<sup>くら</sup>ぶるに青衣の天子（晉の懷帝）及び夭折の童子（宋の端宗）等に與するのみ。『遺聞』 猶お其の公忠・鍊達を謂うは、過てり（『明季北略』卷之四・一葉～二葉・崇禎元年戊辰・「思宗烈皇帝」条）。

①『續資治通鑑』卷一百八十三・至元十五年・四月戊辰条に「前主に諡を上りて裕文昭武愍孝皇帝と曰い、廟號は端宗とす」。

②『晉書』孝懷帝紀に「七年春正月、劉聰 大會し、帝（懷帝）をして青衣もて行酒（酒令）せしむ。侍中の庾珉 號哭す。〔劉〕聰 之を惡む。丁未、帝（懷帝） 弑に遇いて、平陽に崩ず。時に年三十なり」。

不幸な終わりをとげた皇帝に「懷」や「端」と諡していることからすると、「懷」・「端」は、諡として適切でない。清政権が北京に入城してすぐに崇禎帝の諡を議論したのはいいことである。しかし、擬撰を命ぜられた李明睿は、明の旧臣でありながら、よい文字を用いずに、「懷」字・「端」字を撰んだ。これは、崇禎帝を晉の懷帝や宋の端宗にたとえているのである。『遺聞（明季遺聞のことか）』で李明睿を褒めるのは間違いである、という。

「端」<sup>(1)</sup>字については、『通志』諡略では、「上諡法」の百三十一字の中の一字に分類され、

右、百三十一の諡は、之を君親に用う・之を君子に用う『通志』（卷四十六・諡略第一・諡中）。

とされる。君主や君子に用いるもので、特に悪い意味で用いる文字ではない。

ただし、皇帝に用いた例としては、『明季北略』が指摘するように、元軍に追われ十一歳で亡くなった南宋の端宗に用いられたものがあるだけである。すると、国を追われ夭折したものに用いる文字であったと考えられる。

また、「懷」字については、「諡法解」では、「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」<sup>(2)</sup>の意味とともに、「慈仁（仁愛）なるも短折するを懷と曰う」とある。これも計六奇が『明季北略』で批判するとおりである。

陳逢衡は、『逸周書補注』で、次のように補注をつけている。

義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う。『獨斷』同じ。『史記正義』に「懷」を「德」に作る。『通鑑』漢紀注に引きて「執義行善曰德」に作る。

孔〔晁〕注：人の善を稱す。

補注：春秋の時、晉に懷公圉有り、陳に懷公柳有り。『爾雅』釋詁〔下〕に「懷は、止なり」と。義に止まる故に「義を執る」なり。『詩』周頌〔時邁の「懷柔百神」条の毛傳・集傳〕の注に「懷は來」なり、と。能く衆善を來らす、故に「善を揚ぐ」。

- (1) 欽定『續通志』諡略（卷一百二十・諡略中）によると、「端」と「靖」とは、混同されてきた文字であり、どちらが正しいのか分からないという。

端 『漢書』[高惠高后文功臣]表の煮棗端侯革朱は、乃ち高祖十二年の功臣侯にして、『史〔記〕』[高祖功臣侯者年]表に「靖侯」に作る。『史〔記〕』[惠景間侯者年]表の范陽端侯代は、乃ち中元三年に匈奴王降侯を以てする者なり。而して『漢書』[景武昭宣元成功臣]表に「靖」に作る。「端」・「靖」二字は、篆文 相い近し。故に傳寫 訛なり易し。然らば「端」と諡す・「靖」と諡するは未だ孰れが是なるか詳しくせず。是れ之を識し、以て考えに備う（欽定『續通志』卷一百二十・諡略・諡略中・「端」条）。

- (2) 朱右曾の『逸周書集訓校釋』卷六・諡法<sup>ママ</sup>第五十四・「執義揚善曰懷・慈仁短折曰懷」条に、「揚は、稱なり」と注がある。この注によると「義を執りて善を揚<sup>となえ</sup>ぐるを懷と曰う」となる。

慈仁（仁愛）なるも短折（夭折）するを懷と曰う。『後漢書』章德竇皇后の諡は恭懷とするに注して諡法の「慈仁（仁愛）折（哲）行を懷と曰う」を引く。

孔〔晁〕注：短は、未だ六十ならず。折は、未だ三十ならず。注に訛有り。説は「短折不成曰殤」の下に見ず。<sup>(3)</sup>

補注：其の徳 人に在るも、大年の享無し。故に黎民 之を懷く（『逸周書補注』卷十四・二十九葉・「執義揚善曰懷」/「慈仁短折曰懷」条）。陳逢衡によれば、「義に止まり、多くの善をもたらす」・「徳を有しているものの若死にしてしまう」という意味となる。

蘇洵の「諡法」には、

慈行なるも短折するを懷と曰う。

位を失いて死するを懷と曰う。

新たに改む。古の晉の懷公圉・欒懷子盈・楚の懷王は、皆な國を失いて其の民 之を悲しむを以ての故に諡して「懷」と曰う。未だ能く〔未〕來を懷うを以て諡して「懷」と曰う者有らざれば、則ち人の懷うを以て諡して之を懷と為す。懷を思うなり（「諡法」卷四・「懷二」条）。

という。「諡法」の「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」を、「位を失いて死す

(3) 晉の孔晁の「短は、未だ六十ならず。折は、未だ三十ならず」という注に対して、陳逢衡はつぎのように批判する。

補注：晉の穆侯殤叔・宋公與夷 並びに「殤」と諡す。『儀禮』喪服傳に「年十六より十九に至りて死するを長殤と爲し、十二より十五に至るまでを中殤と爲し、八歳より十一に至りて死するを下殤と爲し、七歳より以下は無服の殤と爲し、生まれて未だ三月ならざるは殤と爲さず」と。『釋名』釋喪制に「未だ二十ならずして死するを殤と曰う。殤は傷なり。哀傷す可きなり」と。〔陳逢 衡 以下のように〕案ず。前に「慈仁なるも短折するを懷と曰う」の孔注に「短は、未だ六十ならず。折は、未だ三十ならず」と。此の處の「六十」に當りては當に「十六」に作るべし、「三十」は「十三」に作るべし。蓋し「長殤」「中殤」を謂うなり。若し年 未だ六十ならざれば、下壽を去ること遠からず。焉くんぞ短なるを得んや。『洪範』に「六極、一に曰く凶短折」と。「短」は上殤と爲し、「折」は下殤と爲す（『逸周書補注』卷十四・三十六葉・「短折不成曰殤」条の補注）。

「短」が六十歳未満、「折」が三十歳未満では長すぎ、『儀禮』や『釋名』などの用例から考えると、文字をひっくりかえして十六歳・十三歳にするのがよい、というのである。

るを懷と曰う」に改めている。蘇洵の「諡法」によると、「徳を有しているものの夭折する」か、「位を失って亡くなる」ことを「懷」の意味としている。

また、『通志』諡略では、「懷」字を、「中諡法」の十四字の中の一文字に分類し、それらの文字を、悲しむべきことや、後が無い者に用いる文字であるとする。

右、十四の諡は、之を閔傷に用う・之を後無き者に用う『通志』（卷四十六・諡略第一・諡中）。

すると、「懷」字に、は「義に止まり、多くの善をもたらす」という意味を持ちつつ、「寿命を全うしない」の意味をもった諡字となる。これは、これまでの王朝が、前王朝の最後の皇帝に、否定的な意味を徹底させた諡号をあたえたこととは、異なっている。

では、どうして崇禎帝に配慮を示したのであろうか。

そもそも、(2) で検討したように、清政権は、北京に政権を置いた、すぐの時期に崇禎帝の諡号を決めている。この時期には、まだ南明政権などがあり、明朝の立場に立つ人々の気持ちを考慮したと思われる。ただし、前王朝の皇帝に「宗」をつけたことは、変則的であった。そのため、清政権が安定するにつれて、「懷宗端帝」という諡号は、批判されることになる。

ちなみに、『宋史』によると、「懷宗」という諡号（廟号）は、金によって北に拉致されていった北宋の「欽宗」に擬せられたことがあった。

〔南宋・高宗の紹興〕三十一年（一一六一年）、欽宗の諡を議するに、〔洪邁〕曰く、淵聖 北狩して返らず。臣民 悲痛す。當に楚人の懷王を立つるの義の如くし、「懷宗」と號し、以て復仇の意に係けるべし、と。用いられず（『宋史』洪邁傳）。

洪邁（字は景廬、号は容齋。江西鄱陽の人。宋・宣和五年〔一一二三〕～宋・嘉泰二年〔一二〇二〕）は、戦国時代、秦に抑留されたままでなくなった楚の懷王に、楚が「懷」と諡した故事と重ね合わせて欽宗を「懷宗」とすべきだというのである。

もしも、李明睿がこの典故をふまえて「懷宗」としたのであれば、不幸な亡

くなり方をした崇禎帝を悼むという意味が込められた諡号（廟号）であったともいえるのではないだろうか。

さらにいうと、「諡法解」には「懷は、思なり」とあり、『逸周書補注』では、「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」・「慈仁なるも短折するを懷と曰う」の意味を解釈しているという。

懷は、思なり。

補注：『爾雅』釋詁〔下〕に「懷は、思なり」と。此れ「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」・「慈仁なるも短折するを懷と曰う」の義を釋するなり（『逸周書補注』卷十四・五十九葉）。

(1)・(2) で検討したように、時系列的には、清政権がさきに「懷宗」と決め、南明政権がすこし遅れて「思宗」と擬撰している。つまり、「懷宗」も「思宗」も同じ意味となり、清政権・南明政権ともに、崇禎帝に対して同じ評価をしていたことを示している。これは、偶然でこうなったのかもしれない。

ちなみに、南明政権の決めた「弘光」の年号について、つぎのように伝えられている、。

〔崇禎十七年五月〕壬寅（十五日）、監國福王 皇帝の位に武英殿に即く。……年號は閣が「弘光」・「定武」と擬す。上 祝天探丸して「弘光」を得。後、尙書の張愼言 清の「順治」の〔年〕號を聞きて曰く、「光（光）」字は火に従う。清の「治」は並びに水に従う。恐らくは水 能く火に克つ、と（『國權』卷一百一・六〇九九頁・思宗崇禎十七年・「五月壬寅（十五日）」条）。候補となった年号を占った結果、「火」をふくむ「弘光」となった。後に、張愼言が、清政権の年号が「水」をふくむ「順治」であると聞き、火は水に負けてしまうといたたのである。

では、つぎに「莊烈愍皇帝」について検討してみたい。

## ② 莊烈愍皇帝

清・順治帝は、崇禎帝に対して同情的であった。王弘撰（字は無異、又の字は文修、号は山史、又の号は待庵。陝西華陰の人。明・天啓二年〔一六二二〕～清・康熙四十一年〔一七〇二〕）の『山志』に引く『北遊集』に、明を滅ぼしたのは、臣下のせいであり、崇禎帝は道を失った君子ではないと順治帝が述べていたという。

僧弘覺<sup>①</sup> 『北遊集』を著わし、章皇帝（清・順治帝）の昌平に出狩するを載す。……〔清・順治帝〕又た言う、近ごろ<sup>ちか</sup>『明史』を修むるに、朕（清・順治帝）羣工に妄りに崇禎帝を議すること得ずと敕す。又た閣臣の金之俊に碑文一道を撰び、隧道に堅つを命ず。天下後世をして明代の國を亡ぼすは、罪 臣工に繇<sup>よ</sup>りて、崇禎帝は道を失うの君に非ざるを知らしむるなり、と……（『山志』初集卷一・「北遊集」条）。

①『池北偶談』（卷三・談故三・「善果寺御書」条）によると「世祖 書を弘覺禪師に賜う。……都城の西に善果寺在り」。

②乾隆四年重修『世祖實錄』によれば、順治帝は順治十六年十一月十五日に昌平州に狩に行く。また、順治十七年九月二十六日に、昌平州に御幸している。

また、(2) で検討したように、順治十六年（一六五九）三月十五日に、順治帝から碑文の撰を命ぜられた金之俊はつぎのようにいう。

……明の〔歴〕史を読む者は、咸な崇禎帝の天下を失うや、徳を失うの故

---

(4) 欽定『明史』には、つぎのようにある。

帝（崇禎帝）萬歲山に崩ず。王承恩 從死す。衣襟に御書して曰く、朕（崇禎帝）涼徳（不徳）にして藐躬（弱い）なれば、天咎に上干（当たる）す。然れども皆な諸臣 朕（崇禎帝）を誤てばなり。朕（崇禎帝） 祖宗に見ゆるに面目無し。〔そこで〕自ら冠冕を去り、髪を以て面を覆わん。賊の分裂に任ずも、百姓の一人も傷つくこと無かれ（乾隆四年〔一七三九〕武英殿刊『明史』卷二十四・本紀第二十四・莊烈帝二・十一葉）。

欽定『明史』は乾隆四年（一七三九）に刊行されたものであり、もちろん順治帝は見えてはいない。また、はたしてこのとおりの遺言であり、その遺言の文を順治帝が見たのかは、分からないが、欽定『明史』の記述によると、崇禎帝は亡国の原因を臣下のせいになっている。



に非ず、總じて人臣の國を謀りて忠ならざるの致す所に由るを知る。後の人臣と為る者は、悚然と戒むる所を知り、而して後の人君と為る者も、亦た人を用いるに慎むを知るを庶<sup>こいねが</sup>うなり……（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷一百二十四・順治十六年三月丙午〔十五日〕条）。

崇禎帝は、失徳の君ではない。国が亡んだのは、臣下が不忠だったためである。だから、臣下となるものは慎まなければならないし、君主となるものも人を用いることを慎まなければならないというのである。これは、順治帝の意向をうけた意見であろう。

さらに、順治帝は、順治十六年（一六五九）十一月二十七日（西暦：一六六〇年一月九日）に諡号を、「莊烈愍皇帝」と改めるよう命じた時に次のようにいっている。

〔順治十六年十一月二十七日〕禮部に諭すらく。前明の崇禎帝 勵精にして治を圖ること十有七年。不幸にして寇亂ありて國 亡び、身は社稷に殉ず。其の生平を考えるに、甚だしき失徳無く、茲の厄運に遭<sup>あ</sup>うは、殊に矜憫（憐憫同情）に堪<sup>た</sup>ゆ。〔そこで〕宜しく諡號を加え、以て實行（德行）を昭かにすべし。今、諡して莊烈愍皇帝と爲す。爾が部 即ち諭に遵いて行なえ（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷一百三十・順治十六年十一月甲申〔二十七日〕条）。

崇禎帝は、熱心に政務に勤めること十七年で国が亡んで、それに殉じてしまった。その生平を考えると、甚だしい失徳はないのに、この不幸に出会うのは憐憫に耐えない。そこで、諡号を撰して、崇禎帝の徳行を明らかにした、というのである。

乾隆四年（一七三九）に重修された『世祖實錄』の記述であるからかもしれないが、ここでは、「懷宗端皇帝」を「莊烈愍皇帝」に改めるという記述はない。この時に、始めて崇禎帝の諡号が決定したような書き方である。「懷宗端皇帝」という諡号は、ドルゴンが勝手に決め、「宗」を含んだ不適切なものであったため、通行していたことさえ否定したかったのだろうか。

では、順治帝の意向によって改められた「莊烈愍皇帝」は、どのような意味をものであったのか。

「愍」は、「諡法」によると、<sup>(5)</sup>

國に在りて憂に遭うを愍と曰う（在國遭憂曰愍）。

國に在りて難に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。

禍亂 方に作らんとするを愍と曰う（禍亂方作曰愍）。

民をして悲傷せしむるを愍と曰う（使民悲傷曰愍）。

①②『逸周書』諡法解は、「在國遭憂曰愍」を「在國遭難曰愍」に、「在國逢難曰愍」を「在國連憂曰愍」に作っている。『逸周書集訓校釋』巻六・「在國遭憂曰愍／在國連憂曰愍」条では、「難」と「憂」とを、「難は外患なり。〔それは〕災癘水旱・民 夭折多きなり。憂は、内難なり」と注している。

とある。

蘇洵の「諡法」では、

(5)『逸周書補注』は、つぎのような注釈をしている。

國に在りて難に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。「難」は去聲なり。『獨斷』同じ。「史記正義」は、「逢難」に作る。『左傳』閔公の釋文は、「遭難」に作る。疏は、「逢難」に作る。『穀梁』閔公の疏 同じ。

孔〔晁〕注：兵寇に逢うの事なり。

補注：愍は憂なり、痛なり。欽定『續通志』諡略に曰く、古は「愍」と「閔」と通ず。故に凡そ『春秋』の「閔」と諡する者は、皆な即ち「愍」なり。又た「潁」と通ず。『史記』は、宋閔公・魯閔公を皆な「潁」に作る。三字は寔に是れ一義なり。又た南宋以來、兼ねて「憫」字を用う。宋の張廷堅 紹興の時に「節憫」と追諡さる。遼の托卞嘉 道宗の時に「貞憫」と諡さる。〔陳逢〕衡 案ずるに、〔『漢書』古今〕「人表」は、宋の愍公を「敏公」に作る（中華書局本『漢書』古今人表・中下には、「愍」に作る）。民をして折傷せしむるを愍と曰う（使民折傷曰愍）。盧文弨 曰く、折は「正義」前編「悲」に作るは非なり。

孔〔晁〕注：苛政 賊害す。

國に在りて憂に連なるを愍と曰う（在國連憂曰愍）。盧文弨 曰く、「正義」前編「連」を「遭」に作るは非なり。注の「仍」は正に「連」字を釋す。

孔〔晁〕注：大喪の多きに仍る（仍多大喪）。

禍亂 方に作らんとするを愍と曰う（禍亂方作曰愍）

孔〔晁〕注：國に政無ければ、動もすれば長く亂る（『逸周書補注』巻十四・三十八葉～三十九葉・「在國逢難曰愍／使民折傷曰愍／在國連憂曰愍／禍亂方作曰愍」条）。

國に在りて難に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。

或いは「閔」に作る。『史記』魯閔公・宋愍公の類は、皆な「潛」に作る。

義 同じ（「諡法」卷四）。

という。

つまり、「愍」には、国内において災害や外からの災難に遭遇する・戦乱が起ころうとする・人々を悲しませることなどの意味があるというのである。

また、「愍」字は、『通志』諡略では、「中諡法」の十四字の中の一字に分類され、右、十四の諡は、之を閔傷に用う・之を後無き者に用う（『通志』卷四十六・諡略第一・諡中）。

悲しむべきことや、後が無い者に用いる文字であるとされる。『通志』諡略では、「愍」字は、「殲夷（誅滅すべき人）」や「小人」に用いる「下諡法」には分類されていない。「愍」字は、否定的にもちいられる文字ではなかったのである。

なお、「愍」字の諡をあたえられた皇帝には、晋の愍帝と後唐の愍帝がいる。ちなみに、晋の愍帝の前の皇帝は、懷帝である。偶然かもしれないが、崇禎帝の諡は、「懷」字から「愍」字に改められる。

「莊」字・「烈」字については、『通志』諡略で、「上諡法」の百三十一字の一字に分類され、

右、百三十一の諡は、之を君親に用う・之を君子に用う『通志』（卷四十六・諡略第一・諡中）。

とされる。君主や君子に用いる文字であるという。

「莊」字は、<sup>(6)</sup>「諡法」に、

兵甲 亟<sup>おこ</sup>やかに作すを莊と曰う（兵甲亟作曰莊）。

圉（辺境）に<sup>あき</sup>叡らかにして克く服するを莊と曰う（叡圉克服曰莊）

敵に勝つに強きを志すを莊と曰う（勝敵志強曰莊）。

原野に死すを莊と曰う（死於原野曰莊）。

屢しば征し殺伐する莊と曰う（屢征殺伐曰莊）。

武なれど遂げずを莊と曰う（武而不遂曰莊）

✓(6)『逸周書補注』は、「勝敵志強曰莊」を欠いているが、それ以外は、つぎのように注釈説明される。

兵甲 亟やかに作すを莊と曰う(兵甲亟作曰莊<sup>①</sup>)。

孔[晁]注：數しば征するを以て嚴と爲す。

補注：周王它の諡は莊王なり。漢 明帝の諱を避くるの故に「『漢書』古今」人表」に「莊」を「嚴」に作る。然れども二字 亦た相い通ず可し。故に孔[晁]注は「數しば征するを以て嚴と爲す」。嚴に非ざれば、何を以て難に死せん。以て[莊]・嚴・釐の三つの諡の義俱に嚴字を以て相い替う(『逸周書補注』卷十四・二十七葉～二十八葉・「兵甲亟作曰莊」条)。

①『逸周書集訓校釋』では、「亟は、數なり」(『逸周書集訓校釋』卷六・九葉)と注があり、それによると、「兵甲 亟<sup>しば</sup>作すを莊と曰う(兵甲亟作曰莊)」となる。

圍(辺境)に叡<sup>あき</sup>らかにして克く服するを莊と曰う(叡圍克服曰莊<sup>①</sup>)。

孔[晁]注：邊圍に通じて能く服さしむるなり(『逸周書補注』卷十四・二十八葉・「叡圍克服曰莊」条)。

①『逸周書集訓校釋』では、「叡は、深・圍は、強なり」(『逸周書集訓校釋』卷六・九葉)と注があり、それによると、「圍叡にして克く服するを莊と曰う(叡圍克服曰莊)」となる。

原野に死すを莊と曰う(死於原野曰莊<sup>①</sup>)。

孔[晁]注：嚴に非ざれば、何を以て難に死せん。

補注：社稷を辱めず、宗廟を辱めず、身を以て焉に殉ずるは、莊と謂う可し(『逸周書補注』卷十四・二十八葉・「死於原野曰莊」条)。

①『逸周書集訓校釋』では、「原野に死す」は、國の爲に軀を捐するなり(『逸周書集訓校釋』卷六・九葉)と注がある。

屢しば征し殺伐する莊と曰う(屢征殺伐曰莊<sup>①</sup>)。

孔[晁]注：嚴を以て之を釐(おさ)む

補注：傳に曰く、敵を殺し果を致し以て戎經を昭かにす(『逸周書補注』卷十四・二十八葉・「屢征殺伐曰莊」条)。

①『逸周書集訓校釋』では、「屢しば征し殺伐する」は、勇を好み力を尙ぶなり(『逸周書集訓校釋』卷六・九葉)と注がある。

武なれど遂げずを莊と曰う(武而不遂曰莊<sup>①</sup>)。

孔[晁]注：武功 成らず。

補注：此れ乃ち戎を止めるを武と爲すの義なり。楚の莊王の如きは、是れなり。遂げずとは、窮兵耀武ならずを謂う。孔[晁]の解は非なり(『逸周書補注』卷十四・二十八葉・「武而不遂曰莊」条)。

①陳逢衡の解釈によれば、「武(戦闘停止)して遂げず(武力を誇示せず)を莊と曰う」。また、『逸周書集訓校釋』では、「遂は、成なり」(『逸周書集訓校釋』卷六・九葉)と注があり、それによると、「武なれど遂らずを莊と曰う(武而不遂曰莊)」となる。

とある。「原野に死すを莊と曰う（死於原野曰莊）」・「武なれど遂げずを莊と曰う（武而不遂曰莊）」は、否定的な意味を持ち、「兵甲 亟やかに作すを莊と曰う（兵甲亟作曰莊）」・「屢しば征し殺伐する莊と曰う（屢征殺伐曰莊）」は、軍事を行なったという意味を示し、「圉（辺境）に叡らかにして克く服するを莊と曰う（叡圉克服曰莊）」・「敵に勝つに強きを志すを莊と曰う（勝敵志強曰莊）」は、強い意志を持っていることを示している。つまり、国に殉ずる・戦争を行う・強い意志をもつなどの意味を示す文字であった。

また、蘇洵「諡法」巻二では、

嚴敬にして民に臨むを莊と曰う（嚴敬臨民曰莊）

威にして猛ならずを莊と曰う（威而不猛曰莊）

履正にして和を志すを莊と曰う（履正志和曰莊）

とある。蘇洵は、うやうやしく人々に君臨する・威厳がありながら猛々しくない・正しい道を実践して和することを志すという意味を持った文字であるという。

「烈」字については、すでに (3) で検討したように、「諡法」では、「功有りて民を安んずるを烈と曰う」・「徳を秉りて業に遵うを烈と曰う」という。

蘇洵の「諡法」（巻二）は、「民を安んじて功有るを烈と曰う」・「徳を秉りて業に遵うを烈と曰う」とあり、「安民」と「有功」とが反対になっていることのみが変更されているところである。

つまり、戦功があって人々を安んじた・徳をにしがたって伝来の事業をおとしめない（孔晁の注による）という意味を持つものである。

すると「莊」字にはすこし否定的な意味は含まれるが、「莊烈」には、批判の意味はうすいのではないかと考えられる。また、「愍」字にも、徹底的に批判するような意味合いはない。やはり、順治帝の意向があるのだろうか。

ちなみに、『逸周書集訓校釋』（巻六・「兵甲亟作曰莊 / 叡圉克服曰莊 / 勝敵志強曰莊 / 死於原野曰莊 / 屢征殺伐曰莊 / 武而不遂曰莊」条）で「莊と壯は同じ」と注している。このように、「莊」と「壯」とが通用すると考えることができるのならば、「莊烈」は、前秦の苻堅の諡の「壯烈」と同じということになる。

『資治通鑑』にいう。

〔孝武帝太元十年（三八五）八月〕辛丑，〔後秦王の姚〕萇 人を遣りて〔苻〕堅を新平の佛寺に縊らしむ。……〔苻〕萇 其の名を隠さんと欲して，〔苻〕堅に諡して「壯烈天王」と曰う。……〔苻〕堅の庶長子の苻 丕 始めて長安の守らず，〔苻〕堅 已に死するを知り，喪を發して皇帝の位に即き，〔苻〕堅に追諡して「宣昭皇帝」と曰い，廟は「世祖」と號す（『資治通鑑』卷一百六・晉紀二十八・孝武帝太元十年（三八五）条）。

姚萇は，苻堅を弑した悪名を隠そうとして「壯烈天王」と諡したという。ただし，この諡は用いられず，諡は「宣昭皇帝」・廟号は「世祖」という苻丕が贈ったものが用いられる。

もしも，漢人官僚が「莊烈愍皇帝」と選定し，その「莊烈」が，この苻堅の故事を踏まえているとしたならば，清政権を姚萇に見立て，苻堅を崇禎帝になぞらえ，清政権が「其の名を隠さんと欲して」いるということを示したかった，と考えることもできる。

以上検討してきたように，清政権の撰んだ諡号から見ると，順治帝の考えによって，崇禎帝に対する評価は，亡国の君主でありながら否定的なものではなかったと言えるだろう。

ただ，後になると少し修正が加えられるようになる。そこで，いますこし崇禎帝の評価について検討してみたい。

## (5)

董含（字は閔石，又の字は榕城，号は蒼水，別号は贅客・莼郷贅客。江蘇松江華亭の人。明・天啓四年〔一六二四〕～清・康熙三十六年〔一六九七〕以後。順治十八年辛丑恩科〔一六六一〕二甲二名の進士）は、『三岡識畧』で，崇禎帝を「雄略の君」としてつぎのようにいう。

懷宗<sup>①</sup>（崇禎帝） 入りて大統を繼ぎ，太阿（政務）を獨操（ひとりで処理する）し，擾勤惕勵（身をつつしむ）し，日昃も暇あらず，聲色嗜好は一つも留

意する所無し。末年に寇盜蜂起し、災變 迭々<sup>あら</sup>見われ、宮廟（宮殿）に喋血（流血）す。唐・宋より以來、未だ斯の如きの酷なる者有らず。愚（董含）嘗て之を「以下のように」論ず。明 興り昏庸の君に二あり、武宗（正徳帝）・熹宗（天啓帝）是れなり。雄略の君に二あり、英宗・懷宗（崇禎帝）是れなり。二君 宜しく國をほろぼすべからざる者なり。〔しかし〕乃ち事 相い反する者有り（英宗は土木の変で捕虜になる）。蓋し明は懷宗（崇禎帝）に亡びざること明らかなり。猶お漢の獻〔帝〕に亡びず、桓〔帝〕・靈〔帝〕に亡びるがごとし（『三岡識畧』巻一・「崇禎亡國」条）。

①「懷宗」とすることから、順治元年六月から順治十六年十一月二十七日までに書かれた文章である可能性がある。

崇禎帝は、皇位を継承してから、ひたすら政務に専心したが、悲惨な結果になってしまった。董含は、崇禎帝を英宗と同じく雄略の君であると考え。ただし、両皇帝ともに変事にあってしまう。

また、傅維麟（原名は維楨、字は箇臣。後に名を維麟、字を飛曙に改める。号は掌雷、又の号は歎齋。直隸靈壽の人。明・萬曆三十六年〔一六〇八〕～清・康熙六年〔一六六七〕。順治三年丙戌科〔一六四六〕二甲六十二名の進士）は、康熙三十四年〔一六九五〕に刻された『明書』のなかでいう。

史官の贊に曰く、帝（崇禎帝）恭儉聰明にして、凡そ禮樂刑政 皆な其れ自ら出づ。防邊に至れば固より<sup>ふせ</sup>圍ぎ、心を竭盡さざるは無し。第だ人積玩（なおざりとなる）を経て、帝の心を仰體する能わずして、血刃繆（失策）を致し、「天祿（天からあたえられた福祿）<sup>とこしえ</sup>永に終えん」（『書經』大禹謨）。〔これは〕帝の罪に非ざるなり。〔崇禎帝が〕烈烈として死するは、從來の亡國の未だ帝の如き者有らず。其れ北地の王と英氣を<sup>なら</sup>埒ぶに堪ゆ。諸々の凡（<sup>すべて</sup>凡）の行事は皆な人の耳して之を目にする所なれば、敢て臆斷せず。章奏の散失・故籍の存せざるに縁り、遂に「本紀」を成す能わずと、云う（康熙三十四年〔一六九五〕・本誠堂刻本『明書』第十九卷・本紀十六。懷宗端皇帝<sup>①</sup>本紀・一葉～二葉）。

①「懷宗端皇帝本紀」とすることから、順治元年六月から順治十六年十一月二十七日までに書かれた文章である可能性がある。

崇禎帝は、すべてに心を尽くしたか、人々がいうことを聞かなかった。これは、崇禎帝の罪ではない。亡国の君主で、このようにして国に殉じたものはいなかった。当時の清の君主と英気は拮抗していたというのである。

このように崇禎帝を肯定的に評価することは、明の滅亡・崇禎帝の殉国直後の時代の雰囲気を示しているものである。それに、すでに検討した順治帝の評価もこうした時代の雰囲気に配慮したものであったのだろう。

さらに、張岱（字は宗子、一の字は石公、号は陶庵、また蝶庵居士とも号す。浙江紹興の人。明・萬曆二十五年〔一五九七〕～清・康熙二十八年〔一六八九〕）は、『石匱書後集』で、崇禎帝を中興の君主にも比べられるという。

石匱書に曰く、古來の亡國の君は一ならず。酒を以て亡びし者・色を以て亡びし者・暴虐を以て亡びし者・奢侈を以て亡びし者・窮兵黷武（無理な戦いをする）を以て亡びし者有り。嗟、我が先帝（崇禎帝）心を求治に<sup>なや</sup>焦み、<sup>なや</sup>旰食宵衣（勤勉に政務を執る）し、恭儉（恭しくつつましく）にして辛勤（苦勞して勤め）、萬幾（政務）に無曠（おこたらない）なり。即ち古の中興の令主も、以て之に過ぎる無し。乃ち竟に<sup>かんぶ</sup>萑符（沢の名：『左傳』昭公二十年）の劇賊（反乱者）ありて、遂に身<sup>おと</sup>を殞すに至る（『石匱書後集』卷第一・烈帝本紀・中華書局刊・四十頁）。

しかし、このように評価する一方で、崇禎帝の性格的な面を批判している。

又た曰く、先帝（崇禎帝）治を求むるに<sup>なや</sup>焦み、<sup>おき</sup>財を理むる（財の管理）に<sup>きび</sup>刻しく、人を<sup>むさぼ</sup>用いるに<sup>すみや</sup>渴り、法を行なうに驟かにして、以て十七年の天下を致す。三翻四覆（くり返し）して、夕改朝更（何度も変更する）す。耳目の前に、一番の變革有るを覚えれば、向後（以後）に之を思う。[そして]一つの用無<sup>いた</sup>きに<sup>いた</sup>訖る。亦た此の十七年の精勵を枉却（無にしてしまう）せざらんや。……賊の城に臨むに至るに及び、先帝（崇禎帝）日に召對し、諸臣 林立す。某事は當に<sup>な</sup>做すべしと言えば則ち羣 之に應じ、某



事を以て當に倣すべからずとせば、毫も籌畫（はかりごと）無し。……厥の繇る所を揆るに、祇だ先帝（崇禎帝）の人を用いるの太はた驟かにして、人を殺すの太はた驟かに因る。一言 合えば則ち諸を膝に加えん（重用する）と欲し、一言 合わざれば則ち諸を淵に墮さんと欲す。故を以て侍從の臣は、止だ唯唯否否たること、鸚鵡の語を學ぶに、聲に隨いて附和するか如きのみ。則ち先帝（崇禎帝） 賢を立てるに方無く、天下の人 所も無く用いられず。危急存亡の秋に至りて、並びに一人の之が爲に憂を分かちて宣力（力をつくす）する無し。從來の孤立無助の主の又た我が先帝（崇禎帝）に若くは莫し……（『石匱書後集』 卷第一・烈帝本紀・中華書局刊・四十二頁）。

『石匱書後集』には、順治十六年（一六五九）の記事があるので、成立はそれ以後と考えられる。いずれにせよ、張岱の批判は、後の欽定『明史』でおこなわれた評価につながるものである。

そうして、全祖望（字は紹衣、号は謝山。浙江鄞縣の人。清・康熙四十四年〔一七〇五〕～清・乾隆二十年〔一七五五〕。乾隆元年丙辰科〔一七三六〕三甲三十六名の進士）になると、「明莊烈帝論」の中でつぎのようにいう。

凡そ莊烈（崇禎帝）の禍を召すは、内に在りては則ち宦官を退くるも終えず、外に在りては和を議するに吝むればなり。……且つ夫れ明の亡びる所以の者は、流賊を以てするに非ず、東に力屈（力をつくす）し、是を以て禍 西に蔓る。向使に當日 東方（清政權）と修睦（和睦）すれば、以て力を荏符（盜賊）に専らにするを得ん。盧象昇・洪承疇・孫傳庭の三人は、皆な賊を平らぐるの已に成效（成果）有る者なり。之を以て〔東事（清との抗争）に〕任ずれば、則ち足らざるも、之を以て西征すれば餘り有り。再び之に假するに數年あれば、西方 晏然たりて、李〔自成〕・張〔獻忠〕の首 梟さる。計 之より出でず。〔しかしながら、崇禎帝は〕〔東事（清との抗争）〕頻りに警あれば、西藩を撤し以て之に赴かせ、盧〔象昇〕は縁りて敗死し、洪〔承疇〕は則ち敗れ降り、孫〔傳庭〕は以て敗斥す。熊

羈の臣（君主を補佐する優秀な臣下） 已に盡き、府庫 又た竭き、即令（たとえ）流寇 京師を陥れざるも、王師（清） 再び至れば、[明は] 將た何を以て之に應ぜん。亦た必ず亡びるのみ。是れ莊烈（崇禎帝）の過ちに非ざれば誰に歸せん……（『鮎埼亭集』 卷二十九・「明莊烈帝論」）。

崇禎帝が禍をもたらしたのは、内部的には宦官を徹底的に退けられなかったこと、対外的には清政權と和睦を容んだことにある。更に言う、明政權が亡んだのは、流賊の李自成のためではない。清政權と和睦して、李自成・張獻忠などの西方の流賊討伐に全力を注がなかったからである。この方針を採用しなかった過ちは、当然崇禎帝にある、と全祖望は述べるのである。

さらに、雍正元年（一七二三）刊の『明史藁』<sup>(8)</sup>では、崇禎帝が熱心に政務に取り組んだのに、国をほろぼしてしまったのは何故かとまず問いを立てる。

……莊烈帝（崇禎帝） 勵精有爲なり。武宗に視<sup>くら</sup>べて何ぞ<sup>た</sup>咎<sup>た</sup>咎<sup>た</sup>霄壤（おおきく異なる）なるに、顧<sup>た</sup>天下を失うは、何ぞや（雍正元年・敬慎堂刻本『明史藁』 卷二百八十八・列傳一百八十三・流賊・一葉）。

そして、国家を危うくさせた神宗・熹宗を継いだ崇禎帝は、これまでの政治を一新した。しかし、この時すでに、国家全般にわたって疲弊していた。崇禎帝は、政務に熱心に取り組んだものの、政治上の判断力に欠けていた。そのうえ、性格は疑い深くて邪推し、勇猛果敢を好み負けず嫌いであった。また、政務を委ねた者たちは、自己保全をはかるだけで能力がなかった。軍事面では、すべてを天子がコントロールし、賞罰が過酷であった。したがって、明朝は、流賊

(7) 後の趙翼も『廿二史劄記』（嘉慶五年〔一八〇〇〕序）において、清政權と和議すべきであったと述べている。

……明の末造に至り亦た然り。外に我が〔清〕朝の兵有り、内に流賊の擾有り。南に討てば則ち北を慮り、北を拒めば則ち南を慮る。早く我が〔清〕朝と通和し、全力を以て賊に辦（そな）えれば、尙お掃除す可し。且つ是の時、我が太祖文皇帝 未だ嘗て必ずしも中原を取らんと欲せず……（『廿二史劄記』 卷三十五・十三葉・「明末書生誤國」条）。

(8) 清朝における『明史藁』・『明史』編纂過程については、拙稿「『明史』道学伝不成立をめぐる諸問題」（『中国研集刊』 秋号（総第二十二号）・一九九八年刊・大阪大学中国学会）の「一、『明史』の編纂」参照。

の李自成によって亡ぼされたけれども、流賊がその原因ではない。崇禎帝は、亡国の君主ではないが、亡国の運命に遭遇し、救国の能力を欠いていた、というのである。

莊烈帝（崇禎帝） 神〔宗〕・熹〔宗〕の後を承く。神宗は、晏安（安楽）にて、〔政務を〕養癰（ほったらかしにする）す。熹宗は、闡（<sup>した</sup>宦官）に<sup>はずか</sup>嘖し<sup>は</sup>み士を<sup>は</sup>僇しむ。〔その結果〕元氣 盡漸し、國脈 垂絶（危機に瀕する）す。<sup>かり</sup>向使に熹宗の御曆 僂た數載を延ばせば、則ち天下の<sup>やぶ</sup>及びて再び傳わざるなり。幸にして莊烈（崇禎帝）の統を繼ぎ、銳意に用人を更始し、行政 煥然と一新す。然れども是の時に當り、臣僚（群臣百官）の黨局 已に成り、草野（民間）の物力 已に耗え、國家の法令 已に壊れ、邊疆の搶攘（混乱） 已に甚だし。莊烈（崇禎帝） 志は宵旰（勤勉に政務を執る）に勤め、治は名實<sup>ただ</sup>を核すと雖も、而れども人才の賢否・議論の是非・政事の得失・軍機の成敗 未だ中を灼見（洞察）し・外に<sup>ゆ</sup>揺らがざる能わざるなり。且つ性 多疑にして任察（邪推する）なり、好剛<sup>①</sup>（勇猛果敢を好む：『論語』陽貨に「剛を好みて學ばざれば、其の蔽や狂」）にして尚氣（勝ちを好む）なり。任察なれば則ち苛刻にして恩は寡<sup>すく</sup>なし。尚氣なれば則ち急遽（慌てふためく）にして失措（処置を誤る）なり。夫の羣盜 滿山、四方 鼎沸するに當りて、政柄（政權）を委ねらるる者は、庸（平凡）に非ざれば即ち佞、勦・撫の兩端は茫として成算無し。内に九卿、外に〔總〕督・〔巡〕撫に至れば、救過（過ちを正す）するに不給（乏しい）にして、<sup>おおむ</sup>大率ね規利（自分の利益を図る）・自全（自己保全）の心を有り。其の或いは言語 戇直（愚直）にして、事の弊を切中（直言）する者は、率むね皆な摧折し以て去る。而して任じて闡帥（地方にいる將軍）と爲る所の者は、事權（指揮權）中制（制限規制）され、功過（功績） 償う莫し。一方に敗れば即ち一將を<sup>ころ</sup>戮し、一城を<sup>やぶ</sup>隳られれば即ち一吏を殺す。賞罰 太はだ明らかにして而して後に罰する能わざるに至り、制馭（規制） 過嚴にして而して後に制する能わざるに至る。

加えて以て天災流行し、饑饉<sup>しきり</sup> 沴<sup>いた</sup>に臻り、政は繁にして賦は重く、外は誼<sup>みだ</sup>れ内は叛く。之を一人の身に譬えれば、元氣 羸然として、疽毒 並びに發し、厥の症 固より已に甚だ危うし、而して用うる所の醫は、良否 錯<sup>まじ</sup>わり進み、劑<sup>くすり</sup>は則ち寒熱 互いに陳ぬ。病の膏肓に入り、救う可き無し。家督を爲す者 僂た強いて起きて自ら治むれば則ち其の身亡びざらんと欲すと雖も、豈に得可けんや。是の故に明の凶びるは流賊に凶べり。而れども其の凶ぶを致すの本は流賊に在らざるなり。人の疽毒に凶くなる者の其の凶くなるを致すの本は亦た疽毒に在らざるが如し。嗚呼、莊烈は凶國の君に非ず、而れども凶國の運に當り、又た救凶の術に乏し。徒に其の焦勞（焦燥）禍亂を見るに、上に子立（孤立）すること十有七年にして、而して帷幄（天子の側近）に良・平（漢の高祖の謀臣の張良と陳平）の謀を聞かず、行間（軍隊）に未だ李・郭（唐の名將の李光弼と郭子儀）の將を覩ず。卒に宗社の顛覆を致し、徒に身を以て殉ず。悲しきかな……（雍正元年・敬慎堂刻本『明史藁』卷二百八十八・列傳一百八十三・流賊・一葉～二葉）。

なお、この文章は、欽定『明史』流賊傳に、わずかな文字の訂正はあるものの、そのまま載せられている。<sup>(9)</sup>したがってこの評価は、乾隆朝における公式見解であったのであろう。

ただし、欽定『明史』本紀の贊になると、つぎのようにいう。

贊に〔以下のように〕曰う。帝 神 [宗]・熹 [宗] の後を承け、慨然として爲す有り。即位の初め、沈機（深謀）もて獨斷（独自に決断）して、奸逆を刈除すれば、天下 治平を想望す。惜しむらくは大勢 已に傾き、積習 挽き難し。廷に在れば則ち門戸糾紛し、疆場（戰場）は則ち將は驕にして卒は惰なり。兵荒（戦争による荒廃）は四告し、流寇は蔓延す。遂に潰爛（破裂）して救う可きも無し。不幸と謂う可きのみ。然れども位に在る十有七年、聲色<sup>ちか</sup>を邇づけず、憂勤惕勵（憂慮・警戒する）し、心を治理<sup>つ</sup>に殫くす。朝に臨みて浩歎（嘆息）し、慨然として非常の材を得んこと

を思うも、其の人に匪ざるを用い、益ます以て事を償る。乃ち復た宦官を信任し、要地に布列し、舉措 當を失い、制置（処置）乖方（妥当でない）す。祚 運移に訖び、身 禍變に罹る。豈に氣數の然らしむるに非ざらんや。大命の歸する有るに迄至り、妖氣 盡く掃われ、而して〔崇禎〕帝は諡を加えられ、陵を建てられ、典禮 優厚なるを得。是れ則ち聖朝（清朝）

✓ (9) 欽定『明史』流賊傳は、つぎのようになっている。

……莊烈帝（崇禎帝）勵精有爲なり。武宗に視<sup>くら</sup>べて何ぞ<sup>た</sup>當<sup>やぶ</sup>だ霄壤（おおきく異なる）なるに、顧だ天下を失うは、何ぞや。……莊烈帝（崇禎帝）神〔宗〕・熹〔宗〕の後を承く。神宗 怠荒にして棄政なり、熹宗 閹人を嚮近（親しむ）す。〔その結果〕元氣 盡<sup>き</sup>漸<sup>じ</sup>し、國脈 垂絶（危機に瀕する）す。向使に熹宗の御宇 數載を延ばせば、則ち天下の亡びて再び傳わらざるなり。莊烈（崇禎帝）の統を繼ぐや、臣僚の黨局 已に成り、草野（民間）の物力 已に耗<sup>つひ</sup>ゆ。國家の法令 已に壞れ、邊疆の搶攘 已に甚だし。莊烈（崇禎帝）銳意に更始（改める）し、治は名實を核す。而れども人才の賢否・議論の是非・政事の得失・軍機の成敗 未だ中を灼見（洞察）し・外に搖らざる能わざるなり。且つ性 多疑にして任察（邪推する）なり、好剛（勇猛果敢を好む）：『論語』陽貨に「剛を好みて學ばざれば、其の蔽や狂」にして尚氣（勝ちを好む）なり。任察なれば則ち苛刻にして恩は寡<sup>すく</sup>なし。尚氣なれば則ち急遽（慌てふためく）にして失措（処置を誤る）なり。夫の羣盜 滿山、四方 鼎沸しするに當り、政柄（政權）を委ねらるる者は庸に非ざれば兪<sup>ゆ</sup>ち佞、勦撫の兩端、芒として成算無し。内外の大臣は、救過（過ちを正す）するに不給（乏しい）にして、人 規利（自分の利益を図る）・自全（自己保全）の心を懷く言語 戇直（愚直）にして事の弊を切中（直言）する者は、率むね皆な摧折し以て去る。其の任じて閫帥（地方にいる將軍）と爲る所の者は、事權（指揮權）中制（制限規制）され、功過（功績）償<sup>やぶ</sup>う莫<sup>な</sup>し。一方に敗れれば即ち一將を戮<sup>ころ</sup>し、一城を褫<sup>やぶ</sup>られれば即ち一吏を殺す。賞罰 太はだ明らかにして而して後に罰する能わざるに至り、制馭（規制）過嚴にして『『明史黨』『後』字有り〕制する能<sup>みだ</sup>わざるに至る。加えて以て天災流行し、饑饉 浮<sup>しきり</sup>に臻<sup>いた</sup>り、政は繁にして賦は重く、外は訖<sup>みだ</sup>れ内は叛く。一人の身に譬えれば、元氣 羸然として、疰毒並びに發し、厥の症 固より已に甚だ危うし、而して醫は則ち良否 錯<sup>まち</sup>り進み、劑は則ち寒熱 互いに投ず。病 膏肓に入り、救う可き無し。亡びざるを何ぞ待たんや。是の故に明の亡びるは流賊に亡べり。而れども其の亡ぶを致すの本は流賊に在らざるなり。嗚呼、莊烈は亡國の君に非ず、而れども亡國の運に當り、又た救亡の術に乏し。徒に其の焦勞（焦燥）・贅亂（錯乱）を見る。上に子立（孤立）すること十有七年なり。而して帷幄帷幄（天子の側近）に良・平（漢の高祖の謀臣の張良と陳平）の謀を聞かず、行間（軍隊）に未だ李・郭（唐の名將の李光弼と郭子儀）の將を覩ず。卒に宗社の顛覆を致し、徒に身を以て殉ず。悲しきかな……（乾隆四年〔一七三九〕武英殿刊『明史』卷三百九・列傳第一百九十七・流賊・一葉～二葉）。

の盛徳 千古を度越(超越)す。亦た以て帝の難を蒙りて、其の身を辱めず、亡國の義烈(忠義節烈)と爲るを知る可し(乾隆四年〔一七三九〕武英殿刊『明史』卷二十四・本紀第二十四・莊烈帝二・十一葉~十二葉)。

即位当初には、魏忠賢一派を処断したので、天下は喝采した。しかし、すでに国運は傾き、文官・武官ともに頼りにならなかった。まことに不幸であったといえる。崇禎帝自身は政務を熱心に行ったものの、用いる人を間違え、ますます事態を混乱させたり、宦官を信任したりした。これらは、天運のしからしめるものであった。ただ、身をもって国に殉じたことは、評価されるべきである、という。崇禎帝の本紀の贊であるので、あからさまな批判は述べられていない。

このように、康熙以後になると、崇禎帝の皇帝としての資質が問題とされるようになる。努力したものの、それが報われなかった不幸な皇帝であったという順治帝の評価とは異なってくるのである。

### おわりに

南明政権の諡号・廟号の選定作業は、国を滅ぼし、それに殉じた崇禎帝をどのように評価すべきかで、混乱する。国に殉じたことを表現する文字は、亡国の君主に用いられるものが多く、明の正統を承けたとする南明政権では、それを用いることはできなかったからである。

清政権が最初、あわただしく決めた「懷宗端皇帝」については、亡国の君主に「宗」をつけるという不備があった。また、「懷宗端皇帝」という諡の「懷」字には、前面的に否定する意味合いはなく、悲しみを懷くという意味もあった。清政権は、最初から、前王朝の最後の皇帝に否定的な意味を徹底させて諡号をあたえるというようなことは、行なわなかったのである。

順治帝は、ドルゴンの選定した「懷宗端皇帝」を「莊烈愍皇帝」に改めた。この「莊烈愍皇帝」の諡号には、順治帝の同情的評価が反映している。

ところが、後になると、崇禎帝の皇帝としての資質が問題とされるようになる。そして、欽定の正史である『明史』にそのことが明記され、清政権の公式

的な見解となる。ただし、「莊烈愍皇帝」の諡号はそのままであり、欽定『明史』の評価とは、異なるものであった。